



だより



R7.4.15 Vol.2

ペンギンの服

1年生は給食が開始されるまで、午前中で帰っていました。付き添っていたその帰り道。二人の女の子が、「校長先生ってペンギンの服着るんでしょ?」「え?ペ、ペンギンの服?…」「うん!だって早希先生が言ってたよ!校長先生は時々、ペンギンの服着るんだよ!って」「ねえ!」「うん!言ってた!」「時々、ペンギンの服?…。」『あ!もしかして燕尾服のこと??…早希先生…せめてツバメの服と言ってほしかった…笑』

「ところで二人の家って近いの?」「うん!歩いて20分くらい!」「え?遠くない?20分って」「ちがう!20本!」「え?20本?…あ!…20歩か!」「そうそう!でも走ったら14分!」「…う〜ん…二人の家は迷宮の中にあるのだろうか…」「あ!間違った!14秒やった…。」

『歩いて20歩、そこを走ったら14秒…やはり迷宮の中にあるに違いない…笑』

とても可愛い二人組です



今年は…

去年は伝えたい思いが溢れすぎて(笑)、ついつい、文字ばかりの便りになりました。まあ、それはそれでいいかと思うところもあるのですが、今年はもう少し読みやすくしたいなと思っています。今年の登校班の様子です。新班長さん、1年生の歩幅を考えながら、ペースを考えて歩いています。相手を思う心、大切にしたいですね。



四方山話真穴 ver2. 其の二(親の言葉…)

50年近く前です。当時、私が住んでいた家が新築になりました。後で聞いた話ですが、祖父が知人の借金の保証人で肩代わりをしていたらしく、かなり家計が苦しい中、両親、必死にがんばったのでしょね。当時は新築祝いとして、お世話になった大工さんや左官さんと呼んで宴を催していました。そういう場ですので、皆さん背広にネクタイ姿でした。お一人、セーター姿の方がおり、子供心に『なんでセーターなんだろ?』と思いました。宴が終わり、皆さんが帰った後、母が「雅人は将来、ネクタイをしめることができる人にならんといいけんよ!」そう言ってきました。その時、小学4年生でしたが、その言葉に何か強烈な差別意識を感じ、母親に嫌悪にも似た強い違和感を持ちました。でも、まだ言い返すほどの強さはありません。もちろん、もう亡くなっている母のことを悪く言うつもりはありません。そして擁護するなら、母自身も決して裕福ではない農家の出であり、前述の祖父の事情もあり、生活やお金には、かなり苦勞していたのだと思います。日本全体が中流家庭を目指して頑張る!そんな時代でもあったので、我が子への期待から、ついそんな言葉が出たのでしょう。

子供にとって親の言葉は50年近くたった今でも頭に残るほど影響があるものだと思改めて感じています。「子は親の鏡である。」そんなことを書いたことがありますが、それほど親の立ち居振る舞いは子供の人間性に大きく影響します。そして取り繕うことができるほど、子供は甘くはないとも思います。親も人間ですから、聖人君子でいられるわけではありません。弱い面も、もしかしたらずるい面もあるのかもしれませんが。私はそれでいいと思っています。何はさておき、しっかり関わること、そこを大切にしていきたいですね。子供は勝手に学びますから。

----- 切り取り線 -----

便りの感想や学校への要望等ありましたら、お聞かせください。今後の学校経営・運営に役立てていきたいと思っています。